

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No. 14
2018.10

ケム川のほとりを歩いて

「本当に暑くてたまりませんね。」「全く集中できなくて困ります。」こんなに早く真夏の天気になるのは、本当に珍しいと、異口同音に席に着くなり天気の話に会話が集中した。エアコンがないため昼間の暑さは本当にきつい。ケンブリッジ大学のペンブルック・コレッジでの昼食の席での会話である。

私は、昨年3月から9月まで日本大学派遣中期海外研修の機会を得て、5月から9月までケンブリッジ大学の客員研究員として、ペンブルック・コレッジに滞在する機会を得た。6月の初旬としては、異様に暑い年であった。4ヶ月という短い期間であるが英国のペンブルック・コレッジ内で寮生活を経験できたことは、非常に新しい体験・知識をもたらしてくれた。まず、日常生活が東京の暮らしと激変した。一人暮らしとなったことから、食事、洗濯が問題となった。幸い掃除に関しては、ハウスクリーニングの担当の3人の女性(男性の時もある)が週1回のペースで部屋の清掃を完璧にしてくれていたので問題なかった。英国の学寮のシステムの魅力であるといえよう。朝食と夕食は、基本的に自炊し、昼食を大学の食堂で取ることであった。映画『ハリー・ポッター』に登場する食堂と同じような雰囲気、大きなホールである。昼食は、ここで取るのであるが、教員は学生の席とは区別されたハイ・テーブルと呼ばれている一段高いスペースでの食事である。そもそも、学生とは食堂の入り口が異なり、シニア・パロールと呼ばれる部屋で待機し、時間が来ると食堂に入る扉が開かれる。そこからハイ・テーブルのスペースに進む。座席はフェロー、オフィサーであれば教授、学部長、学寮長、区別されることなく、基本的に到着順で詰めて着席するのが礼儀となっており、横一列のテーブルに十数名が着席する。そうすると、いつも異なる人と隣り合わせとなり、そのたびごとに自己紹介し、会話を楽しみながら昼食をいただくことになる。昼食時間が同じ時間帯の人とは何度も顔を合わせる可能性が高い。したがって、親しくなる可能性が高い。ともかく、必然的に隣や向かいに座った人と会話を楽しむこととなるので、自然と知人が増えていく。合理的なシステムであると思う。他にも英国らしいと驚いた点がいくつかある。まず、食器である。座席の前には、ナイフ・フォークがあ

国際関係学部 国際総合政策学科
教授 小野 健太郎



らかじめ置かれているが、それらはすべて純銀製であった。ナイフ・フォーク以外のもの、例えば塩、コショウ入れ、その他、バターナイフなどもすべて純銀製で、しかも、それぞれ、一つ一つが年代物だった。例えば、その時使用していた私のフォークは、1850年ごろに作成されたものであることを教えてくれた。英国古典文学を専攻している先生が、銀食器の刻印の年号を解説し教えてくださったのである。他にも、食事の際に給仕係の人が後ろに控えており、スープが終わると食器を下げてくれ、メインが終わるとまた食器を片付けてくれ、デザート



▲ 食堂への扉

トが終わるとすべて撤去される(ちなみに学生のナイフはステンレス製で、片付けも自分でやる)。これがディナーとなると、更に服装にドレスコードが入る。男性はスーツにネクタイを着用し、OBはガウンを羽織らなければならない。開始時間までシニア・パロールで会話しながら待機する。定

刻になるとドラが鳴らされ、食堂への扉が開かれ、整列しながらハイ・テーブルへと向かう。学生は正装し、直立して教授陣を迎え入れる。会の主催者がラテン語で祈りを捧げてから、一同着席する。約1時間、食事を楽しむ。英国料理はあまり美味しくないといわれるが、本格的なコース料理で、デザートに至るまで洗練されており、非常に美味しかった。終了に際して、一抱えもあるような非常に大きな水の入った銀のボウルが登場し、一人ひとり順番にそこに浸したナブキンで口を拭う。そして次の人にそのボウルを渡す。それが英国流のしきたりであるらしい。その後、一同起立し、再びラテン語での挨拶をしてから、教授陣が退席する。学生はその後自由となるが、教授たちはシニア・パロールに戻ると、そこにテーブルと椅子と人数分の銀食器が用意されている。そこで再びウイスキー・バーボン・食後酒と果物・チーズなどをたしなみながら、更に食堂で交わされた議論の続きをするのである。会話は多岐に渡り、3時間近く話した。何人かの先生が途中で退席する中、最後まで残った者が、今度は自分で片づけをしてから家に帰るのがルールであった。誠に得難い体験をさせていただいた。

日常生活は、基本的に9時から12時までは1877年に竣工したコレッジ図書館(ペンブルック校の図書館)で過ごした。建物の前にはコレッジ出身の英国首相ウィリアム・ピット(小ピット)の銅像がある。開架式の閲覧室となっており、一階の個人用ブースをよく利用した。コレッジの学生たちの利用は、6月の期末試験間近では常に満杯状態であるものの、試験終了後は利用者が激減するところは日本の大学と同じである。6月の卒業式の時期には、コレッジ図書館所蔵の古稀本の閲覧会が開催された。活版印刷の聖書、世界地図など大変貴重なコレクション約20冊を解説していただきながら拝見した。コレッジ図書館の秘蔵品であるらしい。昼食をコレッジで取った後、寮の部屋で少し休憩をし、午後からペンブルック・コレッジを出てケム川を渡って20分くらい歩き、ケンブリッジ大学総合図書館へと向かう。こちらはコレッジ図書館に比べ、はるかに巨大な図書館である。1934年、ロックフェラー財団からの多額の財政援助のもとに開館した。全館開架式であるが、入館証



▲ケンブリッジ大学の多くのコレッジはケム川沿いにある。

を貰うには書類申請をし、写真を提出し、面接を受けなければならない。さらに入館の際にはロッカーに荷物を預け、入館証を提示し、持ち物のチェックがある。電子機器類は持ち込みが可能で、Wi-Fiも使用できる。館内はとても広く、迷路のような感じだが、私は本館南側にあるアオイ・パビ

リオンで英語の文献を講読するようになった。このパビリオンは、日本の株式会社である丸井の社長青井忠雄氏からの寄付金により、本館の一部として付設されたものである。東アジア閲覧室、日本語・中国語・韓国語コレクションの書庫、閲覧室が用意された最新式の閲覧施設である。エアコンも完備され、法律関係の辞書が充実していたことから、毎日夕方までここで作業をしていた。しばらくしてから、元ケンブリッジ大学図書館日本部長であった小山^{のぼる}騰先生から金曜日のアフタヌーン・ティーにお誘いいただいた。総合図書館の喫茶室は2階の奥にあり、あまり大きなスペースではない。コーヒーショップチェーン店とほぼ同じシステムである。そこで何人かの日本人の研究者を紹介された。それぞれ専門分野が違う先生方であり、自由に話し交流を深めることができるチャンスを提供していただいた。とりわけ小山先生からは、ケンブリッジ大学の歴史、私が滞在していたペンブルック・コレッジの特色などを色々教えて頂いた。中でも興味深かったのは、夏目漱石がペンブルック・コレッジに滞在していたかもしれないこと、昭和天皇が皇太子時代にケンブリッジ大学を訪問した際にペンブルック・コレッジと深く関わったことなどである。5月頃にコレッジの内部で財宝展示会が行われたときに、昭和天皇(当時皇太子)からペンブルック・コレッジの学寮長へ贈られた純銀製のケース(菊の紋章入り)が展示されていたのを、私自身も確認していたからである。小山先生によると、ケンブリッジ大学における日本研究は、ペンブルック・コレッジが中心となっていたようである。そのような縁があって、日本大学とペンブルック・コレッジが提携関係を締結し、日本大学からは毎年サマースクールに学生さんが参加するという関係が続いている。

ケンブリッジ大学総合図書館は、アストン・サトウ・シーボルト・コレクションと呼ばれる和漢古書の膨大なコレクションを所持している。これらは明治維新期の英国の有名な外交官であったアーネスト・メイソン・サトウ氏、同様に外交官であったウィリアム・ジョージ・アストン氏、そして、あの著名なハインリッヒ・フィリップ・フォン・シーボルト氏の蔵書が相次いで寄贈収集されたものである(1911年・明治44年)。とりわけサトウ、アストン両氏は、英国での日本研究の第一人者として世界的に著名であり、その後の英米諸国での日本研究の基礎を築いた。現在では日本研究は映像・コミックにまで及んでいるが、その基は彼らの功績によるものである。幕末期より日本に滞在し、活躍したサトウ氏、アストン氏の日本研究に対する情熱には尊敬の念を深く抱くものであり、当時の日本に対し彼らがこれほどの関心を向けていたことに驚きを禁じ得ない。150年以上前に彼らが日本で収集した古書がそのままの知的空間を維持しながら、英国のこの総合図書館に保管され続けており直接それらの資料を閲覧できることに興奮した。

図書館は、電子化が進行し、その利用法や本の保存方法も電子化が進行するものと思われるが、大学の知的空間の基地であることに変わりない。すべての大学図書館が、ますます発展することをここから切望してやまない。

参考文献 小山騰, 2017, 『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み・国学から日本学へ』(勉誠出版)

ESSAY

作家と街-フロベールと北フランスの古都ルーアン

国際教養学科 橋本 由紀子

フロベール大通り、フロベール河岸、フロベール橋、フロベール高校、フロベール文学ホテル、フロベール博物館。ノルマンディーの古都、ルーアンにはこの名前が溢れている。フロベール(Gutave Flaubert, 1821-1880)は、ブルジョワ女性の倦怠を描いた『ボヴァリー夫人』で名高い19世紀フランスの文学者だ。緻密な文体で練り上げられた作品は、近代文学の礎とされる。この作家はルーアン市立病院(現フロベール博物館)に生まれ、この街で育ち、生涯の作家活動を近郊クロワッセの書齋で行った。私は2017年度の1年間、フロベール研究のためにルーアンに滞在し、街中に見られるこの名前に囲まれて過ごした。

地域の芸術家と街との繋がりは深い。フランスではどんな小さな通りにも名前が付けられその種類は様々だが、とりわけ国の誇る芸術家や政治家や科学者あるいは聖人の名前が多い。中でも文学者の名を冠した通りの数は群を抜いており、たとえば『レ・ミゼラブル』を著したヴィクトル・ユゴーの名はフランス各地の通りや広場に見出される。そのユゴーが「百の鐘楼を持つ街」と称えたルーアンにもユゴー通りがある。しかし地方ではとりわけ地域の作家への愛着が深い。この街ではルーアン生まれの17世紀の劇作家コルネイユ、ルパンシリーズのモーリス・ルブラン、フロベールの弟子とされるモーパッサン等が郷土作家として親しまれ、もち

ろん通りや橋の名前となっている。それでもやはりルーアンの顔とされるのはフロベールだろう。彼を訪ねて、ジョルジュ・サンドやゴンクール兄弟など多くの作家もこの地に姿を見させている。

街中にはフロベールの名前だけではなくその姿も遍在している。中心街には銅像が、自然史博物館の壁にはイラストが、市立図書館の吹き抜けには大きな全身像が佇み、ルーアン大学文学部図書館正面にも肖像画と彼の言葉が刻まれている。言うまでもなく図書館にはフロベール関連書籍が充実し、自筆原稿や作家の蔵書等、貴重な資料が保管されている。市立図書館ではしばしばフロベール関連の展覧会が開かれ、フロベールモチーフの絵画や、恋人と交わした髪など作家ゆかりの品々が詳細な解説と共に展示される。図書館はルーアン市と共に、フロベール・モーパッサン研究会の活動も協賛し、国際シンポジウムや朗読会も支えている。

文学は様々な時代や環境に生きる人々の姿を通して、普遍的な人間の姿を感じさせてくれる。地域や言語を超越して世界の人々の内的世界へと広がっていく一冊の本の力は大きい。日々の生活に浸透している作家の名前には、その地で受け継がれてきた、この文学という文化の粋への人々の誇りと敬意が見出される。そうした作家の郷土たる街で、作品に向き合う幸福は言うまでもない。

ESSAY

超高齢社会に投影する「アルジャーノンに花束を」

食物栄養学科 高橋 敦彦

『アルジャーノンに花束を』[新版](ダニエル・キイス著、小尾美佐訳、2015年、早川書房)は、1950年代の米国社会に生きる知的障害を持つ青年チャーリー・ゴードンが知能を高めるための実験的脳外科手術を受けて天才的知能を獲得することから始まるフィクション作品である。アルジャーノンとは、チャーリーが受ける手術を施された実験動物のマウスにつけられた名前である。チャーリーは自ら望んだ高度な知能を手にするが、やがて自らに関わる数々の事実を知ることとなり、性格・感情は変化し、周囲との関係性も変わり苦悩する。アルジャーノンとチャーリーが受けた脳手術は一時的に知能を高めはするが、性格の発達には知能向上に追いつかず社会性が損なわれた。また、高められた知能は時間的経過とともに術前よりも低下する欠陥があった。「ついでに。どーかついでがあったらうらにわのアルジャーノンのおはかに花束をそなえてやてください。」というこの小説の最後の一文に涙した読者は多いことだろう。

この小説は「知能」を主題としているが、「知能」を人の一生における健康・家族・愛情・親友・信頼・財産・社会的地位・名誉などに置き換え、その喪失体験としてとらえてみるとさほど荒唐無稽な話ではないかもしれない。チャーリーのように手術を受けなくても、人は成長とともにある程度の水準まで知能・認知機能を得て、加齢に伴い程度の差こそあれ、それを失っていく。アルジャーノン

やチャーリーが受けた手術は現実には存在しない。しいて言えば、慢性硬膜下血腫による認知症に対するドレナージ手術は知能を高める可能性があるが、この手術とて病前以上の知能は得られない。内閣府発表の平成29年版高齢社会白書によれば、2012年の認知症高齢者数は462万人(65歳以上の高齢者の約7人に1人(有病率15.0%))であり、2025年には約5人に1人になると推計されている。

A氏は上場企業のコンサルタントを長年勤めた才覚の持ち主だったが、認知機能障害を疑われ自動車運転免許の更新ができず奥様に付き添われて私の外来を受診した。「自宅のトイレや浴室に知らぬ人々が入り込んでいて怖い」などのLewy小体型認知症に特徴的な症状から診断は容易であり、専門医の見解も同じであった。残念ながらこの認知症の根本的な治療法は確立していない。A夫人はどうしても夫の病気を受け入れることができず、辛い介護を経験された。A氏は日々幻覚に悩まされ、ほどなく妻子のことも認識できなくなった。数年後、A氏が亡くなり、奥様が挨拶に来てくださった。A氏の最期の言葉は「ありがとう」であり、A夫人はこの一言を聞いたとき、とても救われた気持ちになったそうである。

生老病死は避けられない。日本は超高齢社会であり、認知症対策は待たなしである。知能を高める手術はなくとも、せめて誰もが最期に「ありがとう」と言える社会になればと思う。

● FACULTY PUBLICATIONS

本学部教員の刊行物紹介



近世諸藩における財政改革—濫觴編—

大淵 三洋 著 [八千代出版]

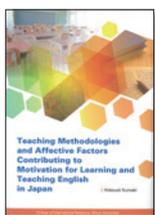
本書の書名の冒頭にある「近世」(modern age; early modern)とは、ヨーロッパ史においては、ルネサンス(Renaissance; Rinascimento)から絶対王政期を意味する。しかし、日本史における近世という時代の範囲は、簡単に論ずる事はできない。論じ始めると世界史にまたがる難解な問題(時代区分論)に直面する。近世の位置について幾つかの見解が存在するのは、事実である。しかし、本書で用いた近世は、乱から治への転換を終えて「幕府体制」と呼ばれる仕組みの下に置かれた江戸時代(Edo period)を中心にするとし、事柄によっては、多少ずつ前後させた時代幅をさす事にした。すなわち、近世、換言するならば、江戸時代は、関ヶ原の戦い後、徳川家康が征夷大将軍に就任し、江戸に幕府を開いた1603(慶長8)年に始まり、1867(慶応4)年に15代将軍の徳川慶喜が大政奉還するまでの265年間と解釈した。本書は、江戸時代前期(濫觴期)の財政改革を研究対象としている。江戸時代は高い経済成長がみられる時代であるが、農業と商業の生み出した富を武士階級が吸い上げる事ができず、武士階級、すなわち各藩が貧窮化していった時代と把握する事が可能である。武士階級が擁護されていたという認識には、修正が必要であろう。



人と組織のマネジメント 改訂版

算 正治 著 [創成社]

人は多くの期待を描き企業の門をたたく。しかし期待が幻影であり、失望と変わる多くの瞬間を眼にしてきた。その多くは管理者が人の意欲の充足法を知らないことから生じる。マズロー(A.H. Maslow)は人それぞれ、「生理的欲求」、「安定・安全の欲求」、「社会的欲求」、「尊厳の欲求」、「自己実現の欲求」を持つことを発見した。そして「生理的欲求」、「安定・安全の欲求」が満たされない限り他の欲求は弱いままだとしている。この理論を援用し成功した企業の1つがアップル社である。この企業は儲かる企画と販売に特化し、儲からない製造をすべて途上国に移管するといった大胆なファブレス化を行った。そして生きるための対価としてもらえるわずかばかりの金やモノの為にでも人は必死になって働くという「生理的欲求」に働きかけコスト削減に成功した。しかし「生理的欲求」が満たされ「尊厳の欲求」や「自己実現の欲求」の充足に向かう豊かになった人々の心を満たすには金やモノによるマネジメントは機能しない。拙著ではこの新たな動機づけの問題の解決への施策を理論とケーススタディを用いて考察した。また改訂版ではグループ活動にも焦点を当て、個人では解決できない複雑な問題の解決や新たな発想を生む技法も紹介した。



Teaching Methodologies and Affective Factors Contributing to Motivation for Learning and English in Japan

熊木 秀行 著 [なでしこ出版]

本書はPart I (Teaching Methodology)、Part II (Affective Factors Contributing to Motivation for Learning English)、Part III (Affective Factors Contributing to Motivation for Teaching English)の3章仕立てによるものである。

Part Iでは、日本の英語教育を小学校・中学校・高校・大学のそれぞれについて概観したのち、大学入試が抱える問題についても言及をした。次に、英語教育を語る上で重要なコンセプトである、ALTの問題、WE・ELF・EILの3つの『英語』という言葉における捉え方について触れ、最後に、英語教授法として近年支持を得て来ているCLIL、EMI、Flipped Classroomについての言及も行った。

Part IIとPart IIIでは、英語学習をする上で大きなキーワードであるMotivationをテーマに、Part IIにおいては、学習を進めるにつれてMotivationが上がる学生と下がる学生について、その原因と対策についての考察を行い、Part IIIでは、教員側のMotivationも非常に大きな

要素であると考え、教員自身のMotivationの変化についても考察を行った。

今後は、学習者の性別・年齢・母語によってもMotivationに変化が見られるのかどうかにつき、研究を進めて行く意義があるものと考えている。



中国経済の発展と構造変化—サービス化社会への変貌と課題

陳 文學 著 [フリープレス]

中国は今年、改革開放政策の実施から四十周年を迎える。改革開放当初、中国は世界最貧国グループの一員だったが、2016年に一人当たりのGDPが8,000ドルを超え、中進国の上位レベルとなった。2010年、中国の経済規模は日本を抜き世界第二位に上りつめ、現在、日本の2.5倍、アメリカの5分の3の規模である。しかし、中国経済は驚異的なスピードで先進国に追いついた半面、産業構造の転換は遅れている。例えば、経済のサービス化を示すGDPに占める第三次産業の比率において、中国は2015年に50%に達したものの、アメリカの79%、日本の73%を大きく下回っている。

経済のサービス化は、経済発展の「量」から「質」への転換を意味する。今や多くの中国人は豊かになり、サービス享受する段階へとその需要がシフトしている。中国経済のサービス化はそうした需要サイドの力だけではなく、ネット通販、シェア・エコノミー、モバイル決済、高速鉄道等のニューサービス産業による供給サイドの後押しによるところが大きい。

本書は需給双方からみた中国の産業構造の変化およびサービス化社会の到来について分析を試みたものである。学生諸君の中国経済を理解するための一助となれば幸いである。



日本人の認知的特徴と人格的成長に関する文化心理学—相互協調的自己観と包括的思考—

伊坂 裕子 著 [福村出版]

政治の世界で問題とされた「村度」は、日本的なのだろうか。また、数々の国際比較調査で、日本の若者の自己肯定感が低いことが示されているが、日本の子どもや若者の自己肯定感の低さは、本当なのだろうか、そして、本当だとしたら、それは問題なのだろうか。「日本人ほど自らの国民性を論じることを好む国民は他にいない」(南博, 1994, 『日本人論—明治から今日まで—』はしがきより)という。そして、日本人が自らの国民性を論じるときに、ややもすると実証的裏付けのない、日本人や日本文化批判となる危険性がある。一方で、最近の文化心理学の進歩は著しく、実証的な文化比較によって、文化とところの関係をとらえる研究が次々に発表されている。本書は、西洋人対東洋人という枠組みの中で語られることの多い日本人の社会的認知やスピリチュアルな態度など人格的成長について実証的にとらえたものである。心理学の誕生以来、「こころ」は普遍的と信じて進められてきた心理学の研究が、ここへきて、こころと文化の間に目覚めた。文化とところの関係を探ることは、こころの本質に迫る道となる可能性が高い。本書を通して、まだまだこれから展開が楽しみなこの分野の魅力を知っていただければ幸いである。

● 本学部教員の共著など一覧

書名(出版年月)	著者名等	出版社
基本経済学 (2018年4月)	大淵 三洋、芹澤 高斉 編著 東馬 宏和、川戸 秀昭 分担執筆	八千代出版
Japanese Business Culture and Practices: A Guide to Twenty-First Century Japanese Business Protocols, Second Edition (2018年5月)	武井 勲、Jon P. Alston 共著	iUniverse
18歳からわかる 平和と安全保障のえらび方 (2016年1月)	梶原 渉、城 秀孝、布施 祐仁、 真嶋 麻子 分担執筆	大月書店
核の脅威にどう対処すべきか—北東アジアの非核化と安全保障 (2018年3月)	鈴木 達治郎、広瀬 潤、藤原 帰一 編、 永井 雄一郎 分担執筆	法律文化社
コミュニティ・スクールのご全貌 (2018年2月)	佐藤 晴雄 編著 富士原 雅弘 分担執筆	風間書房
学校教育法 実務総覧 (2016年7月)	入澤 充、岩崎 正吾、佐藤 晴雄、 田中 洋一 編著 富士原 雅弘 分担執筆	エイデル研究所
Nブックス 臨床栄養学概論 (2018年2月)	渡邊 早苗、本間 和宏、佐藤 智英 編著 葛城 裕美 分担執筆	健甞社
イラストで学ぶ 栄養士・管理栄養士の世界 (2018年9月)	末永 美雪 編著 篠原 啓子 分担執筆	学建書院
ヒューマンボディからわかる解剖生理学第5版 (2017年12月)	Barbara Herlithy 著 坂井 建雄 総監訳 大久保 暢子、工藤 宏幸 監訳 安西 なつめ、坂田 憲昭 訳	エルゼビア・ジャパン

* 太字は本学教員

所蔵資料紹介

伊豆修禅寺温泉細圖

国際総合政策学科 宮川 幸司

江戸時代はわが国の観光の夜明けともいわれる時代で、現代の旅行ガイドにあたる「道中記」や「名所図会」、「絵地図」などがすでに登場してきていた。本図書館には天保5年/1834年に修善寺温泉の宿屋当主である伊



▲伊勢屋藤兵衛板「豆州修善寺温泉細見之圖」(図1)

勢屋藤兵衛が描かせた『豆州修善寺温泉細見之圖』(図1)が所蔵されている。この絵図は修禅寺の境内を中心に5つの外湯や少なくとも19以上もある宿屋の位置を描いた参詣者や湯治客のための観光案内図となっている。

ペリーが来航した嘉永6年/1853年には『東海道五拾三次』や『名所江戸百景』を描いた著名な浮世絵師初代歌川広重(寛政9年/1797年～安政5年/1858年)が『六十余州名所図会』の錦絵連作で『伊豆修禅寺湯治場』を制作している。この作品では青色、特に藍色の使い手として海外にまで聞こえた初代広重の面目躍如たる色使いを見ることができる。錦絵とは多色摺りの版画のことで、浮世絵版画の最も進化した形の版画である。

本図書館には同じく広重が手がけた錦絵『伊豆修禅寺温泉細圖』(図2)が所蔵されている。この図の中央部分と前述の『六十余州名所図会』のもの比べると、山の形や色使い、また樹木や岩を穿って流れ落ちる川の流れと飛沫の様子、そして桂川にかかる渡月橋と虎溪橋とその上を歩く人の後ろ姿等多くの共通点を見つけることができ、両図の風景の切り取り方に違いはあるものの、同時期の同一の題材と思われる。前者には画中に建物などの説明は一切なく風景画に徹しているのに比べ、後者の『伊豆修禅寺温泉細圖』は絵図右下に記載されている「浅羽保右衛門」から依頼された湯治客のための温泉案内図となっている。そこには、文久3年/1863年に焼失した「修禅寺本堂」(明治16年再建¹⁾)、「熊野権現」(明治10年焼失²⁾)、源頼家墓所の「経堂」などの参詣箇所、温泉宿や外湯の場所がわかりやすく示されている。天保5年の図及び本図とも浅羽氏の宿、浅羽屋が修禅寺境内へ登る石段すぐの場所にあり、現在の「あさば旅館」とは場所が異なるが、これは後に「浅羽楼別荘涵水閣」として建てられた別館に移ったからであり、当時の浅羽屋は門前の一等地にあったことがわかる。

実はこの『伊豆修禅寺温泉細圖』には墨摺り版³⁾も存在する。江戸後期以降、冒頭に紹介した伊勢屋藤兵衛をはじめとする修善寺温泉のその時々有力経営者らは修善寺温泉の案内図を作成してきた。初代広重が『六十余

州名所図会』で修善寺を取り上げたことは修善寺温泉の当事者にとってはまたとない好機であったに違いない。浅羽屋の当主が初代広重に温泉案内図の作成を依頼することとなったのは自然な成り行きであったろう。

ところで、本図書館が所蔵する『伊豆修禅寺温泉細圖』は赤絵あるいは開化絵と呼ばれる明治初期の錦絵に多用された鮮やかな赤色が使われているようだ。さらに広重の署名に加えて墨摺り版にはない菱形の落款がある。嘉永6年頃と思われる姿をとどめた絵図が初代広重の没後となる明治初期のスタイルで彩色されているのはどういうことであろうか。

明治初期に活躍したのは三代広重である。初代広重の晩年にその門人となり、二代広重が師家を去った慶応元年/1865年に、その後を継いだといわれる。したがって、初代の遺した作品は数多く目にしたと推測される。その後すぐに明治期に入り、三代広重はそれまで人々が目にしたことがなかった鮮やかな赤を効果的に使い文明開化の象徴である東京や横浜の洋館や蒸気機関車、また洋装の人物などを扱った多くの作品を発表していく。

これは推測でしかないが、明治になってから浅羽氏から初代広重の版木を使って増摺したいという依頼が三代広重にあり、これを受けてこの多色摺りの錦絵『伊豆修禅寺温泉細圖』が制作されたのではなかろうか。三代広重の作品のうち、菱形の落款を付した作品に着目すると、確認が取れたものだけでも明治3年に4点、明治4・5年の両年に各2点、明治6年に1点ある。一方、明治5年に新井旅館が創業、明治6年には「河原湯」、「杉の湯」の外湯が発見され、風景が変化することから、この増摺版が制作された時期は明治3年から4年ごろではないかと思われるのである。

この興味の尽きない錦絵を一度見ていただければ幸いである。

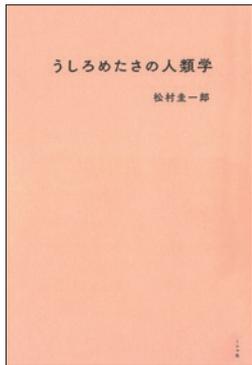
参考文献 1 小林 豊, 1987, 『修善寺の歴史』/2 岩城 魁 編, 1898, 『修善寺新誌』
3 木暮金太夫, 2003, 『錦絵にみる日本の温泉』



▲広重筆 浅羽保右衛門蔵板「伊豆修禅寺温泉細圖」(図2) 修禅寺の左隣に「阿さばや」(浅羽屋)が見える。

推薦図書紹介

● RECOMMENDED BOOKS



うしろめたさの人類学

松村 圭一郎 著 [ミシマ社]

国際関係学部の学生にふさわしい1冊としてこの本を推薦したい。比較文化、異文化理解、国際協力や社会について大学生らしい学問的な疑問に対するヒントを提供してくれる1冊である。

著者はエチオピアでフィールドワークを行う人類学者である。その研究から世界がどのように成り立っているかを見取り図を描きながら、社会について感じる不合理感やもやもや感に対して「何事も最初から本質的な性質を備えているわけではなく、さまざまな作用の中で構築されてきたと考える視点」に基づく構築主義という考え方に依拠し、説明を展開している。

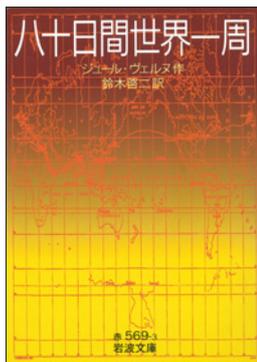
著者はエチオピアで物乞いや精神を病んでいる人を見かけたり、絡まれたりしたが、同時に通りすがりの人が恵みを与えたり、そっと手を引いて「おいで」と連れていくのを目撃した。エチオピアの人々はそれを日常のことと経験している。

日本では物乞いはほとんど見かけない。精神に異常をきたした人は家族や病院、施設に押しつけられ、多くの人が日常生活

国際総合政策学科 大川 英明

活で関わる必要のない場所にいる。著者は今の日本社会では様々なモノのやりとりが商品交換のモードに置換され、自分の利益確保を優先し、厄介な思いや感情に振り回されることを回避する方向に向かっていると指摘する。

このような切り口で第1章では「商品」と「贈り物」の違いをもとに経済の仕組みに言及しつつ、文化や社会を論じ、第2章で「感情」や「共感」が存在するエチオピアに対し、日本では人と人とのやりとりを「経済化＝商品交換化」してきたがゆえに感情が抑圧される社会になっていると言う。第3章では心地よい社会にするためには「感情」論、人間「関係」論、「経済」論の関連において、人と人とのやりとりの方法が重要であることを主張している。以下、「国家と国民の関係」、「市場」、「援助」について論じ、最後に「公平」性について考察を加えている。国際関係学部の学生にとり、気になる問題ばかりである。行動の源泉としての「うしろめたさ」の意味に着目し、これらの概念がどのように関連するかを是非本書で確かめてほしい。



八十日間世界一周

ジュール・ヴェルヌ 著 / 鈴木 啓二 訳 [岩波書店 岩波文庫]

本書は、『海底二万里』『十五少年漂流記』などを代表作とするSFの父と称されるジュール・ヴェルヌの作品であり、発行された当時は空想科学小説であった。ヴェルヌが本書を雑誌に掲載したのは、日本初の鉄道が新橋－横浜間に開通した1872年である。岩倉使節団が1871年から632日かけて欧米視察を行い、トーマス・クック社は222日間の世界一周の観光旅行を実現していた時期とも重なる。

1872年、イギリスの裕福で厳格な知識人フィリアス・フォッグは、トランプ仲間と八十日間で世界一周という賭けを行い、従者バスバルトゥーとともに世界一周の旅に出発する。フォッグは行く先々で素晴らしい世界の文化や人々と出会い、旅につきものの多くのトラブルに直面しながらも冒険を続ける。海外旅行などまだ夢であった時代に、様々な国々の生活や文化が描かれ、世界をひとつにつないでいく交通機関の発達とインフラの整備を背景に、旅行というシステムが近代化されていく過程がうかがえる。

国際総合政策学科 大川 英明

庶民の世界一周旅行などまだ夢の時代であって、八十日間という条件設定が本書の面白さを際立たせ、そこで描かれる世界の風景とフォッグらの旅の体験が人々を魅了したのである。同時に、観光学の観点からは、様々なエピソードが「近代観光の幕開け」を考える教材と見なされ、観光を学ぶ学生には是非勧めたい必読書である。

フォッグの旅を通して、旅の魅力とは何か、旅行が商品として成立するための構成要素は何か、またその仕組みが明確となり、近代観光の幕開けを予見させる。本書は1956年に映画化され、アカデミー賞最優秀作品賞を受賞する。当時のスクリーンに映し出された様々な国々の様子は、現代のようにインターネットもSNSもない時代に、まだ見ぬ素晴らしい世界への憧れを創出し、旅先が後に海外旅行のデスティネーションとなることを示唆した。このように世界を旅する素晴らしさと近代観光事業のシステムについて考える格好の教材であるが、理屈抜きに楽しく読んで、世界旅行の魅力を感じて欲しい。



「あ」は「い」より大きい!? 音象徴で学ぶ音声学入門

川原 繁人 著 [ひつじ書房]

「名は体を表す」と言いますが、ゴジラという怪物がコシラだったら、またベギラゴンという呪文がヘキラコンだったら、イメージは変わりますか? どちらの方が強そうですか? ミルというものやマルというものがあるとしたら、どちらが大きいと思いますか? プーバとキキだったら、どちらが尖ってそうだと思いますか? 女性の名前かと思ったら実は男性の名前だった、というような経験はありますか? このような現象は音象徴と呼ばれ、日本語だけでなく、言語が異なっても似たような傾向が観察されています。この本は実験結果の紹介などを通して、音象徴に関して科学的に解説してくれる本です。つまり、どういった音がどういった印象を与えるか、そしてなぜそのような印象を与えるのかを教えてくれます。しかも、音声を扱っているだけあり、文体が生き生きとしており、本を読んでいるというよりも、面白い授業を聞いているような、興味深い話を聞いて

いるような感覚でどんどん読み進んでいくことができると思います。著者自身も「半分おふざけみたいな題材を至って真剣に分析すること」を最も得意としていると言っているように、本の中で紹介されている題材も、メイドカフェ、アニメ、ゲームなど、親しみやすいものばかりで、それでいて引用されている文献は学術的であり、分析方法もかなり高度です。そして、知らず知らずのうちに音声学・音韻論の基礎を理解していけると思います。つまり、音象徴を通して音声学・音韻論の基礎が学べる本でもあります。この本は、言語学や音声学・音韻論、心理学などに興味がある人、今から何かを名付けようとしている人、ただ漠然と日本語や外国語の音声に興味がある人に大変お勧めです。加えて、新しい研究テーマのアイデアやヒントを与えてくれるので、論文やレポートのテーマが思いつかないときに読んでみてもよいかもしれません。

国際総合政策学科 大川 英明



図書館の魔女 (全4巻)

高田 大介 著 [講談社 講談社文庫]

国際教養学科 生内 裕子

マツリカは史上最古の図書館に住む「高い塔の魔女(ソルシエール)」。多数の言語を操り古今の書物に通じているが、自らの声を持たない少女である。そこに手話通訳として少年キリヒトが登場し、2人の活躍によって戦争勃発寸前であった海峡地域の動乱を鎮めていく。第45回メフィスト賞受賞作であり、ファンタジー小説として読んでも感動すること間違いなし。しかし、本の帯に「剣でも魔法でもない、少女は“言葉”で世界を拓く。」とあるように、この本は言語の本質についても多くを語っており、一つのことばが謎を解く鍵になり、時には相手の秘密を暴く武器にもなっている。印欧語比較文法・対照言語学の専門家である著者が、至るところに散りばめた言語学の豆知識に、言語を学ぶ人間は否応なしに魅せられていくのである。

たとえば、第2巻には、ある人物がつづやいた「こんなに嵐がひどくなると知りたらしましかば」というひと言から、彼の出身地を突き止め暗殺の陰謀を阻止する場面がある。彼のセリフの中で、

述部の用法が仮定法(過去完了)の規則から外れており、それは、自分の母語の文法規則を別の言語に当てはめてしまったためではないかと推測したのだ。

また、ある国の帝との会談で、マツリカ達は側近の医師の用いる言葉遣いの不自然さに気付き、帝の諱(いみな)である漢字一字を言い当てる。その国では帝の諱を臣下のものが用いてはならないという慣習があるという知識に基づいて、秘密を看破したのだ。

この本には、著者の言語に対する愛があふれている。難解な専門書ではなく分かりやすいファンタジーという形を用いて、言語の持つ深遠な世界とその力を壮大なスケールで描き出す。国同士の争いを、武力ではなく会話と策略で解決したマツリカに、現在の国際情勢を重ねて読む人もいるかもしれない。国際関係学部の学生にはぜひ手に取ってみたい本である。



西行

白洲 正子 著 / 秋元 啓一 写真 [新潮社 新潮文庫]

ビジネス教養学科 岡野 雄司

西行とは、百人一首にもその作品を残している、西行法師という名で主に語られる、平安末期の武士であり、僧侶であり、歌人である。藤原氏の血筋で恵まれた環境に育ち、弱冠20歳前後で鳥羽上皇の北面の武士を務めた上に、宮中作法、有識故実に優れ、和歌も抜群にうまいという、いわばスーパーエリートである。にもかかわらず23歳の時に突然出家してしまい、それ以降は全国をめぐる漂泊の旅をしながら和歌を詠み続けた人物である。

今回紹介する白洲正子の作品は、西行の漂泊の旅の足跡を追う紀行文のような形をとりつつ、その折々に西行の詠んだ和歌を読み上げ、吟味しながら西行の人間性に近づこうというものである。

風になびく富士^{けふり}の煙の空に消えて
ゆへも知らぬわが思ひかな

富士の煙に何を思ったのであろう。正子は答えを出している。

和歌・短歌に近い形式として俳句がある。このところTV番組の影響もあり、俳句の人気は急上昇らしい。俳句と和歌の違いは、和歌が思いのたけを存分に歌い上げるのに対して、俳句は季語を主役にして風景やシーンの一節をセンス良く切り取り料理するといったところか。和歌は恋愛や人生観などを読み上げるのに向き、武士などが今際の際に自分の思いを詠みあげるためには短歌形式でなければならない。

この本で取り上げられている西行の作品は、豊富なうえに名歌が多く、味わい深い。のどかな休日にゆっくりと紐解いては如何だろうか。花と月の歌人と言われた西行の歌の世界に身を浸すとき、私たちは千年の悠久の時を超え、日本人であることの感性を再確認するのではないだろうか。

ねがはくは花のしたにて春死なむ
そのきさらぎの望月の頃



世界一うつくしい昆虫図鑑

クリストファー・マーレー 著 / 熊谷 玲美 訳 [宝島社]

食物栄養学科 小柳津 周

本誌 Bibliotheca No.11で紹介させていただいた『昆虫はすごい』(丸山宗利著)では、昆虫が兼ね備えている特殊な能力や機能についての話でした。今回は『世界一うつくしい昆虫図鑑』をご紹介します。本図鑑では昆虫たちが織り成す色彩美や造形美を鑑賞して頂きたいと思えます。昆虫図鑑ですが美術書としても楽しめます。本図鑑は全米で話題となった作品の日本語版です。

前回は述べましたが、昆虫は必ずしも好まれる生き物ではありませんが、昆虫たちが繰り広げる芸術性には、圧倒されます。本図鑑を鑑賞すると昆虫たちが、なんと美しく、かわいらしい生き物であるかを実感させられます。生物学を学んだ方は、その知識を加味しながら鑑賞すると昆虫が備えた芸術を理解することが出来る可能性もあると思います。

著者のクリストファー・マーレーは、南カリフォルニアで生まれ、オレゴン州、アラスカ州で育ち、これらの環境が本図鑑の制作に影響していると考えられます。本図鑑を彩る昆虫

は、著者が世界各地で採集した昆虫たちで、自然のままの色で紹介しています。また、日本語版では、登場する昆虫に関する説明書きがあり、色彩の謎や造形を幅広く知ることができます。内容は、「昆虫のデザイン」から「環境への影響」及び解説で構成されています。私のお勧めを二、三、紹介いたします。はじめに、「甲虫のモザイク色の練習」では昆虫が生息する6大陸すべてにわたる、数十カ国の100カ所もの土地で採集(168匹)された昆虫が使われ、華やかな色合いを共演しています。次に、「構造」では昆虫の構造上の特徴に驚かされます。奇妙な形をしたもの、途方もなく大きな付属器官を持ち、物理法則に反した特異な昆虫のこっけいさに目を奪われます。最後に、「植物昆虫」では擬態の絶妙さです。著者は植物に擬態する昆虫を植物昆虫(ボタニカルズ)と呼んで、その巧みな模倣で自然にだけ込み錯覚を生み出す姿を絶賛しています。是非、昆虫の芸術を鑑賞して下さい。

STUDENT'S VOICE

私のおすすめる図書館利用法

国際教養学科 3年 菅原 未来

図書館とは私にとって、学生にとって、どのような場所だろうか。私の友人は一度も図書館に行ったことがないと言っていた。ネット社会で情報過多な現代だからこそ、信頼性のある新聞、雑誌、書籍が重宝される場合がある。ここでは、私が図書館を利用して学生生活で役に立った3点をご紹介します。

1つ目は、語学教材だ。言語を学ぶ学生が多いゆえ、図書館には文法書や辞書の種類が豊富である。新しい言語を学ぶ際、どの教材を購入すべきか、悩みがちだ。私は、図書館にあるものをいくつか手に取り、よく吟味することをすすめる。ネットでおすすめされた教材よりも、私達の先輩方が代々使ってきたボロボロの教材の方が私には信頼できるからだ。

2つ目は、留学情報だ。私は、半年間フランスに留学し、そのために留学ジャーナルなどをよく読んだ。その中には、留学後どのようにその経験を将来に活かすかについての記事もあり、そのおかげで留学先で具体的な目標を持って生活できた。また、旅行雑誌を読んで、留学中の旅行を計画したり、廊下に貼られている先輩方の留学レポートを見たりすることで、モチベーションを上げていた。

3つ目は、電子資料だ。図書館のホームページから利用でき、私は日経テレコン21と海外新聞総合データベースPressReaderをよく利用する。日経テレコン21は、検索ワードを入力するとそれが記

載された日経新聞の記事が閲覧できる。実際、私は、2017年12月にトランプがエルサレムをイスラエルの首都として公式に認めてから現在に至るまでの記事を調べた。日に日に増える死者の数、各国同士の会談、国連の動き等が見え、世界の動くスピードに圧倒された。PressReaderは、新聞だけでなく、他国の様々な分野の雑誌が閲覧可能だ。その中に、LGBTQ向けの雑誌もあり、男女共同トイレの普及や芸能人のカミングアウトなど彼らが生活しやすい環境づくりや理解促進運動に日本との違いを感じた。

以上が、私の図書館の利用目的の一部なのだが、それは自分の学生生活や学年と共に変わってきた気がする。図書館は単に本を読んだり、借りるだけの場所ではなく、学生一人ひとりの用途に合わせて存在すると思う。これまで図書館をあまり利用したことがない学生や語学学習や留学で悩んでいる学生にとって、私の情報が少しでも役に立てばうれしい。



国際機関資料室から ● INTERNATIONAL DOCUMENTATION CENTER

日・EUフレンドシップウィーク2018
「Travelling to Europe !!」開催

EU情報センターを併設している国際機関資料室では、毎年5月9日のヨーロッパ・デーを記念して、日本とEUとの交流を目的とするイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

今年は、5月9日(水)～5月31日(木)まで、図書館1階閲覧室にて、「Travelling to Europe !!」と題し、一般人が鉄道、飛行機、大型客船などを使って観光旅行ができるようになった1930年代にEU各国で制作されたレトロなトラベルポスターをBritannica IMAGEQUESTという画像データベースを使いメインの展示としました。その他、EU加盟国の旅行情報や食文化を解説したもの、職員が実際にEU加盟国を訪問した際の写真等も展示しました。

恒例のクイズでは、EUに関連した問題を出題し、正解者には駐日欧州連合代表部提供のボールペンやエコバッグ等のEUグッズと当館で購読している雑誌の付録を景品として提供しました。

今回は、ポスターや写真等色鮮やかな展示となり、EUやその加盟国について興味をもっていた良ききっかけになったのではないかと思います。



図書館ニュース

BIBLIOTHECA

第14号

通巻第159号

発行日／2018年10月1日

編集・発行／日本大学国際関係学部
図書委員会<https://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/>